

斬壺（きりつぼ）

木下望太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

秘太刀「斬壺（きりつぼ）」。

その技を以て、老剣客はかつて岩を斬り、壺を斬った——割ることも砕くこともなく、真二つに——。

ただしそれができたのは、若き日のたった二度だけ。

そして今。辛苦の末に流派を継いだ彼が対峙するのは、剣才そのもののような少年。それはまるで、老剣客の積み上げたもの全てを嘲笑うかのような存在。

もし、奴を斬ることができる技があるなら——それは一つ、「斬壺」。

凡人対天才。

今、その戦いが始まり、そして終わる——。

目次

最終話	19
第5話	15
第4話	11
第3話	8
第2話	3
第1話	1

第1話

八島剛佐は信じていたのに。己の剣技を信じていたのに。今や目の前の一切が、剛佐にとって信じられなかった。

大上段に構えた刀を、一気呵成に振り下ろす——かわされる。下段に構え直すと同時、みぞおち目がけて突きを放つ——弾かれる、相手が手にした脇差に。

剛佐の顔は、白いものも混じる顎鬚は、洗ったように濡れていた。なのに目の前の賊は汗一つかいていない。剛佐の半分にも満たぬ齡格好の童は。

童はあくびを一つして、脇差の背で肩を叩く。もう片方の手で別の脇差をもてあそびながら。腰にずらりと吊るされた幾本もの脇差が、揺られて、からりと音を立てた。

「おっさん、ぼちぼち氣いすんだか？ 命までは取りやあせん、錢も何も置いていけ」

山道に風が吹き、辺りの木がざわめく。剛佐は何も答えなかった。構える刀の切先が、絞るように震えていた。

踏み込む。同時、上段から振り下ろす。面打ちと見せて、刀を横へ回し腰を落とす、脛を断ち斬る——つもりであった。

脇差に、刀は押さえられていた。脛どころか、自分の顔の高ささえ通り過ぎないうちに。そしてもう一本の脇差は、剛佐の喉元に突きつけられていた。

童が笑う。

「おっさん置いてけ、全部置いてけ。錢も刀もなんもかも。命と身いだけ持って去（い）ね」

歯ぎしりの後、震える手で刀を納め。ようやく剛佐は口を開いた。

「拙者、八島弘心流——」

五代宗家、という言葉は、口の中で噛み潰した。

「——八島剛佐衛門紘忠。……お見それした、何流か」

ふ、と童が鼻で息をつく。

「よう聞かれるが。何流も糞もない、何とは無しにかわして斬って、そ

れだけよ」

剛佐は口を開いたが、言葉は何も出てこなかった。

童が言う。

「わしにしてみりや全然分からん。太刀行きにしる脚にしる、何で皆そんなにのろいか。そののんびりした太刀を、何で、さつとかわせんのか。そんで何で、さつさと斬らんか。何で出来んのが分からん」
開いたままの剛佐の口に、汗が一筋流れ落ちた。

背筋を伸ばし、胸を張り、剛佐は宿へと帰りついた。顔は固く、表情はなく、腰に大小の刀はなかった。

宿の者が声をかける。

「お武家様。遭えましたので、噂の賊——『刀狩り』には」

ぐ、と息を飲み込んで、剛佐は笑ってみせた。

「いや、とうとう遭えずじまいであった。出てこようなら成敗してくれたものを」

左様で、と笑う宿の者は、じつ、と剛佐の腰を見ていた。

剛佐は部屋に上がり、残っていた荷物から硯一式を出す。文机の前に座し、姿勢を正して墨を磨った。銭と刀を送るよう、家族へ宛てて簡潔にしたためる。文（ふみ）を乾かし、丁寧に折り、封をした後で。気づけば、握り潰していた。畳へ投げつけた文が、ぺちり、と間拔けな音を立てた。立ち上がりざま文机を蹴る。吹っ飛んだ硯が障子を破り、畳に壁に墨が散った。蹴った、壁を、殴った、畳を。額を柱に叩きつけた。目をつむった闇の中、歯ぎしりの音を聞いた。

第2話

「何故出来ぬのかが分からぬ」

——かつて。腹の底から息をつき、肩を落としてそう言ったのだ、父は。八島弘心流四代宗家は。倒れた剛佐を見下ろすその目はまるで、不治の病にある者を見るかのようにだった。三十年ほど前のことであつた。

道場の床板の上、汗だまりに突つ伏して、剛佐は目だけ上げていた。口を開いても、かすれた息が漏れるだけで言葉は出なかった。それ以前に、何を言うつもりであるかも分からなかった。

弟、ひろたか 紘孝が進み出る。

「父上、左様におっしゃられずとも。兄上ならきつと、この技もいつか必ず習得なさいましょう」

差し伸べられた手につかまり、身を起こしながら。剛佐は見た、優しげに微笑む弟を。その目の奥を。

握り潰したかった、その手を。けれども指は震えただけで、剛佐は力なく弟にもたれた。もうそうしたことは幾度目か分からなかった。そして、父がこう言うのも。

「この程度の技でその様では、到底宗家を継ぐことはなるまい。無論、修めることもできまいぞ。秘太刀きりつば 斬壺きりつばをの」

斬壺。八島弘心流初代宗家が編み出した奥義である。初代をして生涯五度しか成功しなかったというその秘太刀は、術理のみ伝わるも、使い手は絶えて久しかった——

部屋に残していた銭から代金を叩きつけるように渡し、文を出すよう宿の者にことづけた後。

八島剛佐は駆けていた。宿場の人の間を縫い、肩がぶつかるのも構わず駆けていた。夜が青黒く覆いかぶさる空の中、行く手に沈む日だけが赤々と燃えていた。

人影のない町外れ、道から外れた草むらで。剛佐は腰に手をやった。手が空をつかんだところで、刀がないことをようやく思い出す。顔を歪ませたまま、辺りの木立から枯れ枝を拾う。枝葉を払い、木刀のように構え、振った。打ち据えるように。

何故だ。

剛佐はそう問うた。何故だ、何故だ、と、そう問うた。

頭の内に童の顔が浮かぶ。齒を見せて笑った顔、そこに父の、弟の顔が重なる。

まとめて打ち払うように、剛佐は強く枝を振った。

何故だ。越えたはずなのに、なぜまた嘲笑われねばならん。何故だ、何故だ。

そう、越えたはずであった、父のことも弟も。秘太刀「斬壺」の会得を以て。

——その夜の剛佐も今と似ていた。父になじられ弟にかばわれた稽古が終わり、気絶するように眠った後。一人庭に出、腰の刀を近くに置き、木刀を手に素振りをしていた。打ち据えるように何度も何度も。打ち据えたかったのは父か、弟か、それとも己かは分からなかった。

素振りの後、その日教えられた技をさらい、型をなぞる。いつしかその動きは教えられたものではなく、父が稽古していたのを見た「斬壺」の型になっていた。

伝によれば。初代宗家はその技を以て、壺を斬ることが出来たという。無論、壺など割ることは誰にでも出来る。初代はそれを、斬った。生涯のうちに壺を二度、漬物石を二度。いずれも、下に据えた台には傷もつけずに。五度の秘太刀のうち最後の一度、それは墓石に、己の墓に据えるための石に、ずか、と切れ込みを入れたという。

斬壺の術理、その骨子は二つ。太刀行きと手の内である。太刀行きとは、すなわち剣速。常の技のような一步の踏み込みではない、三步の助走。その勢いを足裏から足首、足首から脛、脛から膝。腰、背骨

の一節一節、肩。腕、肘、手首、手指、柄、刀身、そしてようやく切先へと余すことなく、加速しながら伝える。これにより生まれる神速の太刀行きが、切先に限界まで破壊力を与える。

その破壊力を切断力へと変えるのが手の内、すなわち柄の握りである。太刀を振るう向きによって握りを変えるのが常の剣術であったが、斬壺はそれに留まらなかった。太刀が当たった瞬間、その感触に応じて、斬りながらも自在に握りを締め、あるいは緩める。それにより刃は物体に抵抗することなく滑り、食い込み、撫で切り、断ち斬る。脆い壺を砕くことなく、硬い石に刃を折ることなく。

両手で持った木刀を、剛佐は右肩の前で立てた。左足を半歩前に出す、八双の構え。三步踏み込み、振るう。再び構え、踏み込み、振るう。重く夜気を裂くその音は、どうにもいつも通りだった。

「兄上、精が出ますな。秘太刀の稽古にござりますか」

弟が庭に下りていた。手には二振り、袋竹刀ふくろしな——割竹を細長い袋に入れたもの——を提げている。

「しかし兄上。お言葉ですが、別の稽古をなさった方がよろしいのでは」

「……どういう意味だ」

剛佐の視線を避けるように、弟は首を横に振る。笑って。

「いえ、言葉どおりにござります。我らが流派の秘伝とはいえ、誰も使えない手のおらぬ技。実在すら怪しいのではないかと……正直、左様に思いますので」

剛佐は表情を変えなかった。強く握る手に、だらりと下げていた木刀の先が上を向いた。

「嘘うそごとと、そう申すか。我らが剣が、その最奥さいおうが」

弟は変わらず笑っていた。

「いえいえ、仮の話にござります。それより一つ、竹刀稽古でもいかが」

弟が差し出す竹刀を、何も言わずに取った。一礼の後、互いに構える。

いつもの稽古と同じだった。剛佐の竹刀が当たる前に、弟のそれが

剛佐を打った。振り上げる出がかりを抑えられ、振り下ろしたところを弾かれ、その隙を打たれ。三本に一本取り返せればよい方だった。最後、苦し紛れながら全力を込めた、斬壺の型は。あつさりとかわされ、胴を打たれた。

「よい稽古になりました。ありがとうございます、兄上」

額の汗を拭う弟は、変わらず笑っていた。

剛佐に表情はなかった。汗も拭わず、あいまいにうなずいて立ち尽くしていた。

弟が部屋へと戻ってしばらくの後。剛佐は立てかけていた刀を取った。鞘を放り捨て、構えるのももどかしく振るう。柄を絞り折るような力を腕に込めて。砕くように歯を噛み締めながら。己の腕を千切ろうとするかのように、剛佐は剣を振るい続けた。

どれほどの時が経ったであろうか。気づけば空が白んでいた。荒かった息はかすれ、途切れ途切れにさえなっていた。汗に濡れそぼった着物は外気と同じ温度をしていた。疲れ切ったはずの腕は、何故だか刀の重みを感じなかった。指も柄から離れようとしなかった、まるで、ぴたりと吸いついたように。刀の一部になったかのように。

剛佐は口を開けていた。空が白いと、ただそう思った。それ以外の思考はなかった。空を映す刀身のように。

ふらりと刀が動いた、気がした。その切先の方を見れば、庭石があった。肩ほどの高さがある庭石。斬れそうだな、と、そう思った。口を開けたまま。

気づいたときには構えていた。八双の構えだった。考えたわけでもなく距離を取る。岩へ向かって三步の間合い。

駆けていた。地を蹴る堅い反動が、足の裏から土踏まずへ走る。足首へ巡り、骨を伝い肉を駆ける。腰のひねり、背骨のしなり、腕の力がそれに加わる。斬り下ろす刀が庭石に触れた瞬間、勝手に左手が締めまり、右手は緩まっていた。手に感触はなかった。わずかにちか合う音だけが聞こえた。気づけば庭石の頭に、ずかりと刀が食い込んでいた。

未だ柄から手が離れぬまま、どうやって刀を抜いたものかと考え始

めたとき。寝間着の父が、裸足のまま駆けてくるのが見えた。

その朝の内に、剛佐は壺を両断した。父と弟、幾人かの直弟子の前で。初代の伝にあるとおり、据えた台には傷一つつけず――

今。剛佐は枝を手に、斬壺の構えを取る。何度も繰り返した動き。三步の運足、地を蹴る勢いを刀に込め、振り下ろす。空を裂く音はとうにも重かった。もう一度繰り返しても、音は変わらず重かった。

振り下ろした姿勢のまま、剛佐は身じろぎもせずになっていた。やがて息をつき、肩を落とす。

「こんな枝ではどうにもならぬか」

分かっていた。木刀で素振ろうが、刀で試し斬りしようが。斬壺を使ったことは、若き日の二度だけであったことを。どうしてそれが出たのか、自分にも分からないことを。

いくらが残った小枝を丁寧に払い、再び振ったが。やはり、音は変わらなかつた。

第3話

次の日。剛佐は再び童とまみえた。偶然に、である。

宿場町を行き交う人に交じり、剛佐の行く手から童が歩いてきていた。肩には何やら、薦こもにくるんだ長い束をかついでいる。

剛佐はそちらへ駆け出しかけた。が、行つてどうするのか自分でも分からず、足を止める。

目を伏せ、建物の陰に入ろうとしたのに。童は向こうから声をかけてきた。

「おっさん。昨日は世話になったの。怪我あないか」

からりと笑う童の腰には、変わらず何本かの脇差があつた。その一つは剛佐のものだ。

「む、うむ……」

言葉を濁す剛佐に構わず、童は喋つた。

「そらあ良かった。わしやあほれ、小商いに下りてきたとこじやよつて。今日はお陰でうまい飯が食べそうや。有難う」

童は笑つて、かついだ束を軽く叩く。薦の下には幾本もの刀が見えた。無論その一つには見覚えがある。

顔に熱を感じながら、道ゆく者の視線を感じながら、剛佐は言つていた。

「……なぜ、刀を狩る。弁慶のひそみに倣おうとてか、武士に恨みでもあるか」

童は息をこぼして笑う。

「そんな大仰なもんやない、恨みがあるなら命も取つとる。楽に飯食うためよ」

かつぎ直した刀が音を立てる。

「どいつもこいつもものんびりした太刀や、あくびしながら片づけられる。それに武士だけ襲うんなら、後々面倒にはならん。斬り剥ぎされたなんぞお上に言われんけえの。恥の体面のとて、お武家は色々あるらしいよつて」

剛佐は目を見開き、口を開けていた。

歯を噛み締める。震える手を握り締める。叩きつけるように、頭を下げていた。

「再びの……再びの立ち合いを、所望いたす」

童は鼻で息をつく。

「言うても。太刀もなかりうし、一度拾うた命ぞ。二度捨てに来ることも——」

下げたままの剛佐の顔は、硬く歪んでいた。

「所望いたす」

「お断りじや。銭も刀ももろうとる、他に取るもんなかりうが」

「命を」

かつ、と童が喉を鳴らす。

「呆気が。命は買えんが、売れんのじや。わしの商いにならん」

上げた顔を、ずい、と剛佐は寄せる。鼻と鼻とをぶつけるように、目玉の奥をにらむように。かぶりつくように、口を開いた。

「銭も刀も用意いたす、立ち合いを。十日後、日の出、昨日の場所にて」
言い捨て、剛佐は背を向ける。

背中ごしに、ため息の後で声が聞こえた。

「せいぜいたんまり持って来ときな。まけてやる気はないけえの」

町外れまで歩き、剛佐は棒切れを拾った。昨日手にした杖だった。

振るった。満身の力を込めて。何度もそうした後、近くの木立へ駆け、木へと打ちかかった。切り倒そうとでもいうかのように、何度も何度も。

先ほど童と話したとき。つかみかかりたかった。絞め殺したかった、あの場で。そうしていれば、死んでいたのは剛佐の方だったろうが。

何故だ、と問うた。何故敗れたのか、立ち合いを商いなどと言う者に。何故あのような小童に。

そして、何故。自分はあの童ではないのか。あれほどの才を、全て

を鼻で笑えるほどの才を持った者でないのか。

剛佐は何度も木を打った。それはもはや修行ではなかった。

やがて音を立て、棒が二つに折れ飛んだとき。荒い息の下、剛佐は腹の奥で笑った。もしも童の首が飛んだなら、同じ笑いが漏れるのだろうか。そう考えて、また別の棒を探した。

第4話

数日の後、ことづけておいた銭と刀は来た。余計な者と一緒に。

「兄上、お言いつけのものをお持ちいたした」

八島紘孝^{ひろたか}。父亡き今、留守を任せてあるはずの弟が自ら来ていた。

頭を下げて代金を待たせてある宿の自室で、剛佐は弟から目をそらす。

「……ご苦勞だったな」

背筋を伸ばし、弟は言う。

「不躰^{ぶじつ}ながらお尋ねいたす。銭は分かり申す。一人修行に出たといえ、恥掻き捨てる旅の道、ついついの散財もござりましょう。またあるいは、うっかりと失くす、これも無いことではござりますまい。しかし。お腰のものを送れとは、いかなる事情にございましょうや」

「聞くな」

「無礼ながら。町の者どもが噂しており申す、武士のみを狙う斬り剥ぎが山中に出ると。その賊の剣技相当のものにて、命を取らず銭と刀のみを奪うと。よもや兄上——」

踏みしだくように畳を蹴り、剛佐は立ち上がった。

「ついて参れ」

それだけ言つて宿を出ていく。弟も後へ続いた。

着いた場所は町外れ。数日来、剛佐が棒切れを振るっている場所であつた。

「取れ」

言つて、弟へ棒を放る。自らも別の棒を取り、構えた。

「参れ」

「兄上？」

「参れ」

いぶかしげな顔をしながらも弟は構える。そこへ剛佐は打ち込んだ。高い音を立てて棒がかち合う。剛佐はそこから手を緩めず、連続で打ち込んだ。弟は防ぎながらも押されるように後ずさる。

体勢を立て直そうと弟が跳びすぎる、そこへ。剛佐も跳び込んでいた。弟と同じ距離の跳躍、しかし身を開いて片腕を伸ばして。剛佐の片手突きは弟の間合いの外から、正確に喉をとらえていた。寸前で止めてはいたが。

棒を下ろし、剛佐は言う。

「もう一本」

何合か打ち合った後、弟が棒を振り上げようとしたその瞬間。空いた小手を、剛佐の棒がぴたりと押さえる。無論、本来なら打っていた隙だった。

「もう一本」

振り下ろされる棒をはね飛ばし。剛佐は肩へと、したたかに打ち込む。今度は止めなかった。

「取れ」

肩を押さえてうづくまる弟に再び棒を差し出し、剛佐は続けた。

「わしが弱いか」

「兄上、何を……」

「わしが弱いかと聞いておる！」

打った。うづくまる弟の頬を、棒で。無理やりに立たせ、さらに打ち込んだ。

かつて斬壺を成功させた後、剛佐は全ての技を会得した。弟ほどすぐに覚えられたわけではないが、それまでに比べれば遥かに早く、技の骨子を押さえることができた。斬壺を抜きにしても今や弟を越え、先代にも比肩し得る腕となった、そう自負していた。

腕に顔にあぎを作って倒れた、弟へと言い放つ。

「思い違うな。斬らねばならん糞虫がおる、故に刀が要る。それだけよ」

弟は目を伏せながら顔を上げた。

「……心得、申した。しかし、いかにして」

胸の内から押し出すように、剛佐は声を絞り出した。

「斬壺」

その日から。宿場町には妙な光景が見られた。陶物屋すえものといわず古道具屋といわず、宿、酒屋、商家ではない家々までに。壺を売つてくれ、と武士が尋ねてくるのである。

町外れではさらに奇妙な光景があつた。店開きでもしたかのようにな、ずらりと壺の並ぶ前に。抜き身の刀を手にした、年かきの武士がいた。仇でも討ちにいくかのように、白鉢巻に白だすき、袴の裾をか上げた姿で。そのそばには壺を買い集めた武士が、いかにも厳肅な面持ちで控えていた。桶から柄杓で、白鉢巻の武士が手にした刀へ水を注ぐ。それはまるで、介錯の際の作法であつた。

白鉢巻の武士は助走をつけ、裂帛れっぱくの気合いと共に壺へと刀を振り下ろす。当然の如く壺は割れた。いくつかの破片に。

武士はなぜだか齒嚙みして、また別の壺へ刀を振り下ろす。それも同じように割れる。そんなことが繰り返された。遠巻きに眺める町の者もまばらにあつた。

全ての壺を割り終えても、武士の表情は決して晴れなかつた。次の日、また次の日も、徳利といわず土鍋といわず、さらに陶物が買い集められた。

「明朝にござりまするな」

おぼろげな行灯の光の中、宿で弟はそう言った。

開け放つた障子の前、月明かりの下で剛佐はうなずく。何も言わずに。

「勝算は」

弟の声に剛佐はまた、うなずく。

弟がゆつくりと、強く目をつむる。平伏した。

「お逃げなさいませ」

何も言わずにいと、弟は伏したまま続けた。

「兄上が、斬壺なくば勝てぬというほどの相手であれば。……勝ちは、ござりまするまゝ」

剛佐は答えず、身じろぎもしない。

弟が顔を上げた。その目に白く月明かりが映る。

「もしも立ち合うと仰るならば。拙者も、加勢を」

「たわけ」

つぶやくように剛佐は言った。

「立ち合いは一人と一人。他は無い」

「されど……」

剛佐は立ち上がり、刀を手に部屋を出る。

「もう言うな。先に休め」

月明かりの下を一人、町外れへと歩く。壺の破片が散らばる辺りへと着いて、剛佐は刀を抜いた。軽く振る。あまりにも、いつもの手応え。

剛佐は腕をだらりと下げ、ため息をついた。加勢させることができぬなら、それであるの童をなぶり殺せるなら、どんなによいか。けれど流派の長として、いや、剣士として。それだけは出来なかった。それどころか。下手をすれば、弟ともども斬られるのではないか——その光景が頭に浮かび、鳥肌が立った。

かぶりを振り、息をつく。見上げた月はただ白かった。

第5話

翌朝。空も白まぬうちに支度を済ませ、剛佐と弟は宿を出た。二人の間に言葉はなかった。

やがて日が昇り、空が白く輝いた頃。以前立ち合った、街道脇の山道に童は待つていた。道端の岩に腰かけ、手持ちぶさたにか脇差をもてあそびながら。

腰かけたまま、頭をかきながら童が言う。

「来たかおっさん。銭は——」

「取れい」

懐から出した巾着を放る。童が受けたそれは、重く銭の音を立てた。

「何も先に渡さんでも」

「よい、三途の渡し賃と思え」

言いながらも剛佐の顔はこわばっていた。ああ、さっきの隙、巾着を受け止めた隙に斬りかかっていれば。殺せていたかも知れないのに。

「それじゃまあ、遠慮のう。ときに今日は助太刀付きか」

「これはただの立ち会い人、手出しはさせぬ。うぬも、こやつに手出しはしてくれるな」

童は立ち上がりながら言う。

「そらあ構わんが……そうじゃ、先に銭もらうて悪いけえの。これだけでも返しとくわ、そら」

腰に差した何本もの脇差、そこから一つを鞘ごと抜いて放る。見覚えのあるそれは剛佐の脇差だった。

両手を伸ばし、受け止めたそのとき。獣の速さで走り込んだ童が、その抜き放った刃が。剛佐の目の前にあった。

「もう死んだぞ。……命は返したる、刀置いて去ね」

手にした脇差を取り落とし、剛佐は笑った。笑っていた、息をこぼし、肩を揺すり、腹の奥から声を漏らして。

握った、突きつけられた刃の峰を。もう片方の手で拳固をくれた、あつけにとられたような童の顔に。

「ふざけるな。これでも死んだか、わしが死んでおるか！」

跳び退き、刀を抜き放つ。三步の運足、全身の力で振り下ろす刀。斬壺の型で放ったそれはしかし、受け止められていた。童が構えた二本の脇差で、挟むように。片方の脇差で刀を押さえたまま、もう一本を童は横へ抜いた。そして剛佐の胴を払う。どうにか退いてかわせたが、着物の前が裂けていた。

舌打ちした童が構え直す。

剛佐は間合いを取りながら下段へ構える。飛び込んできたなら刀を上げて脇差を払い、その隙に斬り込む——そのつもりだったが。先に弾かれたのは剛佐の刀だった。もう一本の脇差が斬りかかってくる寸前、何とか跳び退く。刃にさらわれた髭が、何本か宙を舞った。

歯を噛み締めて斬り返す。童の手にした脇差、その一方を手から弾き飛ばした。が、その手応えはあまりに軽かった。童は表情も変えず、残った脇差で刀を押さえた。空いた手で腰から別の脇差を抜き、斬りかかってくる。剛佐の目の前を刃が過ぎる。斬られていた、ほんの少し脇差が長ければ。いや、ともに踏み込まれていれば。

その後も同じだった、斬りかかっては返され、返しかけては斬りかかられ。防ぎ、かわすのがやつとであった。

どれほどそうしていた頃か。自らでも一足には跳べないほど間合いを取り、童は口を開いた。構えを解き、柄で頭をかきながら。

「おっさん、腕え上げたか。前よりやだいぶやるやないか」

構えを崩さず、流れ落ちる汗も拭わず剛佐は言う。

「……^{手加減}手心か」

童は笑った。何とも、晴れた空のような笑みだった。

「何のことやら」

剛佐は長く息をついた。長く長く息をついた。それはため息ではなく、紙風船がしぼむような、そんな息だった。

どうしたのだろうか、あの技は。若き日、溶けそうなほど汗にまみれて覚えた技の数々は。それらは確かに今も、拭い去れぬほど体に染

みついているというのに。そして、手心か。

「ふ……ふふ。はは、くっははは」

笑っていた。童と同じ顔で。見上げた空は青かった。日はその光に黄色みを帯びて、山の上で輝いていた。

剛佐は刀を地に突き立て、その場に座した。背筋を伸ばし、手を地につけて。平伏した。

「お見事。お見事なり」

童が手を下ろしたのか、脇差の鞘が、からり、と鳴った。

伏したまま剛佐は言う。

「貴殿、既にして剣の達人なり。見込んで御願いがあり申す、二つ」
顔を上げて続ける。

「一つ。貴殿に習い覚えた流派はなからう、しからば。我が流派、八島
弘心流に加わりたい」

「兄上？」

弟の声が飛んだが、剛佐の表情は変わらなかった。

「貴殿の才に我が流派の術理加われれば。必ずや天下に恥じぬ名人とな
ろう、斬り剥ぎなどでなく」

童はただ口を開け、目を瞬かせているばかりだった。

構わず剛佐は再び伏す。額まで地につけて。

「二つ。拙者と立ち合いを。真に真剣の立ち合いを」

「兄上！」

「黙りおれ！……立ち合いを、所望いたす」

風が吹いた。木々がざわめく。剛佐の頬から汗が滴った。

「おっさん。……顔上げてくれ」

童は脇差を納めていた。頭をかきながら言う。

「よう分からんが。わしや武士やない、あんたのことも斬りとうはな
い。お断りじゃ」

「ならば……賭けぬか」

剛佐は立ち上がり、刀を手にする。

「貴殿がどうあろうと、拙者は斬りかかる。貴殿が立ち合うまで何度
でも。それで貴殿が勝てば、三十……いや、五十両差し上げ申そう」

「兄上、何を……」

弟が駆け寄るが、剛佐はその手を払いのけた。

「黙れ。借財しても構わん、そのときは何としても用意いたせ」
童の方へ向き直って続ける。

「その代わり。拙者が勝てば、我らが門下に加わっていたただく」

何度も目を瞬かせた後、声をこぼして童は笑う。

「おっさん、そりゃ話がおかしかる。わしが勝ったときやええが、おっさんが勝ったときやあ。わしや斬られて命がなかる、どないして弟子入りせえ言うんじや」

剛佐は円く口を開けた。ふ、と息をついて笑う。

「そうか。そうじゃの、可笑しいの。ま、忘れてくれても構わん」

土を払い、刀身を拭う。構えた。

「参るぞ。……抜けい」

最終話

童が脇差を抜くのを見てから、剛佐は駆けつけた。

汗に重く濡れたはずの体は軽かった、羽根でも生えたように。腕も同様だった。刀の重みはまるでなく、まるで掌から柄が、刀が生えているようだった。自然と姿勢は八双の構え、斬壺の構えとなっていた。

駆け、踏み出す一足ごとに、剛佐の体は軽くなった。一足に継ぐ一足、そのたび剛佐は速くなった。地の堅さ砂利の硬さ、足裏の足指の骨の軋み肉の張り、血の巡り。一足ごとにそれが分かった。駆け来る童の刃が迫る。

最後の三步を剛佐は駆けつけた。腰から背骨、肩から腕、肘。手首から十指、柄から刀身。今や剛佐の体には、重みも力みも一切無かった。それらはすでに一点、切先へと伝えられていた。

童が突き出す脇差、今の剛佐にはそれらが遅く見えた。まるでぼた雪が降るように、ゆるりと出される二本の刃。その間を流星のように、剛佐の刀が過ぎる。

童の体へと当たる瞬間。剛佐の十指がかすかに動き、手の内を、握りを決める。自在に緩め、的確に締め、振り抜く。剛佐の刀は確かに、童の体の上を走った。最初に触れたものを、何の抵抗もなく斬り裂きながら。

その後で。ゆるりゆるりと、剛佐の体に脇差が突き立つ。

脇差を握った両の手を突き出したまま、童は立ち尽くしていた。

確かに。確かに、自分は斬られていた。全力で突いたはずの脇差がまるで敵わないほどの速さで。

なのにどこにも傷はなかった。傷があるのは相手の方だった。刀を振り下ろした姿のまま、喉を貫かれ胸をえぐられ、息絶えていた。

風が吹いた。流れ落ちる血が香った。そのままの姿勢で二人はいた。

目を瞬かせ、口を開けたまま、童は両の脇差を抜いた。支えを失い、相手の体は、どう、と地に伏す。

そのとき。走った、傷口が。童の体の上を。

ぴりり、と着物の前が裂け、帯が二つに斬り落とされた。がらりがらりと音を立て、腰の鞘が、脇差が、落ちた。腹にも、胸にも傷はなかった。

風が吹いた。

童は変わらず立ち尽くした。木々が鳴る中、立ち会い人が駆け寄る音が聞こえた。

相手の目は。額を土に汚し、刀を握ったまま伏した、その口の端は。笑っていた。

八島弘心流五代宗家、八島剛佐衛門絃忠、旅先にて没する。その後、弟である絃孝が六代を継いだ。

その後、すぐ、六代は養子を取った。養子は名を改めて、剛四郎絃忠といった。

剛四郎は後に、小太刀を取っては当世無双と謳われる名人となった。しかし、秘太刀「斬壺」は隠居の後、晩年に一度、成功したのみだったという。

(了)